
パネルディスカッション

太田淳、堀本武功、弘末 雅士（文学部教授）、竹中千春（法学部教授）、上田信

大橋：後半のパネルディスカッションを始めさせていただきます。パネルディスカッションには、前半の部でご講演をいただいた先生方に加え、次の先生方に加わっていただきます。本学文学部教授・弘末雅士先生です。マラッカ海域を中心にした海域東南アジア史がご専門でいらっしゃいます。そして、本学法学部教授・竹中千春先生です。国際政治、比較政治、南アジア政治、ジェンダー研究がご専門でいらっしゃいます。以上のメンバーで後半のパネルディスカッションをお願いしたいと思います。パネルディスカッションの進行は、上田信本学文学部教授にお願いしたいと思います。よろしくお願い致します。

上田：それでは、パネルディスカッションは私の進行で進めさせていただきたいと思います。今回の報告では前半部分の歴史、そして政治学という2つの側面からのお話ということになりました。そこが「過去から現在」という副題にしたところになります。

そして、パネルディスカッションの方でこれらを含めた上で、未来への展望を開くことができると考えています。先ほど私の方でこの海域学プロジェクト全体の話をしていただきましたが、大きな流れとしまして、この海域学のプロジェクトは歴史学チーム、政治学チーム、そして文化人類学その他という形での文化学チーム、そして観光学チームの4つのチームから成り立っています。初年度にあたります今年、政治学チームと歴史学チームが報告を担当するという流れを考えており、今回その運びになりました。

時期はまだ確定していませんけど、来年度の後期というか後半になるかと思いますが、こちらの方では今度は文化学と観光学チームにシンポジウムを企画してもらおうと考えており、最終年度にあたります2015年度には少し大がかりに、4つのチームで国際的なシンポジウムに結び付けて総括に持っていくというような大きな流れを考えております。

ということで、今回歴史の話が出ると同時に、現代の政治が出てきて戸惑われた方もあるかと思えます。まずは進め方としてそれぞれのきょうお話をいただいた太田先生、堀本先生の方からそれぞれの話を聞いての感想なり、質問なりの確認をとり、弘末先生は歴史の立場から堀本先生の政治の方への質問、あるいはコメントを含めてお話をいただき、竹中先生は逆に政治の立場から太田先生の歴史の方への質問、コメントをしていくというように、シャッフルできればすごく面白い展開になるのではないかというふうに思います。

まずはコメンテーターの方の発言という形で弘末先生、竹中先生、そして先程報告された太田先生、堀本先生という流れでコメントしていただき、全体をつなぎあわせていきたいと思えます。

弘末：本学の弘末でございます。本日は上田先生、それから太田先生、堀本先生のお話を聞かせていただきました。トピックが時代的にまた領域的にも広域に渡っており、かつ刺激的でありました。みなさまのお話に的確にコメントをするのは難しいことですが、太田先生が私と同じように海域東南アジア史のご専門でいらっしゃいますので、東南アジア史の視点からコメントさせていただきます。

私はASEANという組織が、極めて東南アジア的な歴史的背景の中で出てきたものではないかと思っております。東南アジア史から見ておきますと、一方で広域な世界秩序というものと、他方で個別的な地域世界、あるいは域内秩序という場合もありますが、そういう両方の秩序の構築が裏と表で同時に進行していく、興味深い実態を見ることができます。それはきょうも太田先生がお話しになりましたマレー世界、先ほどマラッカやその後のリアウについて、詳細なお話をされましたが、そうした港市が東西海洋交易の中継港となり、イスラーム世界やあるいは中国の冊封体制に入っていくことによって、広域なネットワーク、広域秩序というものを形成していく。それと同時に東南アジア域内に、マラッカの海洋法が影響力をもつマレー世界という独特の海域秩序ができていく。中継港が作り出していく広域な文明世界と言えるものと、東南アジアの域内世界のマレー世界が展開するわけでございます。そのダイナミズムが、太田先生も本日お話になられましたヨーロッパの持ち込んだ海域秩序によって、どのように変容し、その結末がどうなるのか、追ってみるとなかなか面白いものがあります。

中継港としてかつて隆盛したリアウ王国には、スルタンと副王が存在しておりました。一方シンガポールを開港したイギリスは、その領有を正当化するためにリアウ王国の血縁者を担ぎ出し、その一人であったトゥメンゴンに海賊鎮圧を依頼して取り込んだわけでございます。他方オランダも、リアウの副王に協力を打診し、海賊の鎮圧を依頼します。そして、リングにいたスルタンの方も取り込もうとしたのですが、スルタンはオランダ体制下での収入の減少により、海賊の取り締まりに消極的でありました。

マラッカ海峡を挟んで、シンガポールとリアウ島の間には国境が設けられますが、スルタンの方はそれに構うことなく頻繁にシンガポールのトゥメンゴンの関係者のところに出入りいたします。オランダはスルタンが許可なくイギリス領のシンガポールへ渡ること、海賊鎮圧に消極的であることを問題視し、1857年に彼スルタン・マフムードを廃絶します。ところが廃絶されてから後のマフムードは、なかなか興味深い活動を展開します。彼はこの後マレー半島の彼の血縁関係者や一族がいる場所に移って、そこに居場所を見つけます。そしてシャムの王室を訪れて、シャム王と自分の妹を結婚させ、彼はシャムよりトレンガンとクランタンの支配者として認められました。イギリスは驚きました。マフムードはその後、かつてのジョホール王国（リアウ王国の前身）の宰相の子孫が王国を形成していたパハンに移りました。パハンでは、その後マフムードの推す王位候補者とイギリスの推す候補者の間で、王位継承戦争が起こりました。結局マフムードの推薦者が、内陸民の支持も広範にえて勝利しました。

結局パハンで元スルタンは1864年に亡くなるのですが、植民地領域を拡大しようとするイギリスは、シャムと緊張関係が起こっているところでの、こうした彼の活動に困惑させられました。一方マフムードを廃絶されたリアウ王国には、新たなスルタンが即位しますが、オランダの影響力が強まっていきました。結局この地域では、19世紀後半の1870年代になりますと、

蒸気船による海賊取り締まりが比較的有効に機能するようになりました。もう国境地域での王家の存在価値がないと見たオランダは、この王国を廃絶しようとしています。すると王家は、今度は日本とコンタクトをとろうとしまして、その援助を得ようと画策し、王国の存続をはかろうとします。

結局 1911 年にリアウ王国は廃絶されてしまい、王族たちはシンガポールに移ります。ただし、交渉をとおしてオランダから年金を支払ってもらうことを約束させ、王家が持っていた人間関係をある程度維持してシンガポールに移住しました。また先に話しましたトゥメンゴン、イギリスからその存在価値を認められ、ジョホールのスルタン王家を形成することとなりました。もとリアウ王家関係者の彼らにとっては、今でもリアウが聖地であり続けています。

一方シンガポールは開港以降、東南アジア域内の拠点の役割を果たしていくわけですが、ここがなぜ拠点になりうるのか。それはシンガポールが、関税や寄港税のかからない自由貿易港であったというのが一つの大きな理由であります。もう一つ忘れてはならないのが、東南アジアが消費したアヘンの 80 パーセントをここが供給したという事実です。シンガポールに持ち込まれたインド産のアヘンは、海峡植民地をはじめバタヴィアやマニラ、バンコクなど、そのほかの東南アジア各地に輸出されました。そして、その各地でアヘンの専売請負を担いましたのは、華人であります。

シンガポールをはじめその各地の華人たちは、多くがかつてリアウ王国とも関係し、海峡植民地を行き来した華人でありました。19 世紀の終わりぐらいからシンガポールは、アヘンの請負の収入に頼らなくても自由貿易港としてやっていけるようになりましたが、その基盤を形成したのは彼らと言えましょう。近代の東南アジアの地域概念を作り出す拠点となったシンガポールは、こうして成立しました。

その後東南アジアの国々が独立しまして、1967 年に ASEAN が結成されます。当初は反共の組織だったわけでありすけれど、やがてベトナム戦争終結後、ASEAN は内政不干渉を基盤にしなが、域内の紛争を平和的に解決していこうとする姿勢を出します。そして 1990 年代になると域内の関税を引き下げていく、ASEAN 自由貿易地域の形成を進めました。そうしたなかで、ベトナム、ラオス・カンボジア、ミャンマーも加盟した ASEAN10 が、1999 年に成立いたしました。また自由貿易地域も結成されました。これに先ほども堀本先生のお話にありました中国、韓国、日本、インド、オーストラリア、ニュージーランドが加わりました。そして ASEAN 首脳会議に、当該の十か国をはじめとして、2011 年には上記の 6 カ国とさらにアメリカとロシアの首脳も参加することになりました。その際に、友好協定を確認させられますので、法的な拘束力は持っていませんけれども“紛争は平和的に解決すること”が条項に盛り込まれております。そういう意味では、この ASEAN の組織や活動も、東南アジアの域内秩序を構築しつつ、広域世界秩序の形成を試みた事例と言えましょう。かつて港市は、人が往来し物品が取引されることによって、情報や人的交流がなされる重要な場所でした。一方 20 世紀の後半あたりから、人的交流というのは空港をはじめ都市全般でなされるようになり、情報もインターネットが普及してくる。経済的には、今でもシンガポールというのは東南アジアを結び付ける重要性を持っているわけですが、情報の担い手まで含めた港町としての重要性は低下しているのかもしれない。ただし、ASEAN10 には近代のシンガポールを拠点にして作られた地域概念が、結実しております。そして、ASEAN が対外的に広域秩序を構築していく際には、それ以前のマラッカやリアウが行ったやり方と極めて類似した方法をとっている

ことは、非常に面白いことだと思いました。

そこで、「21世紀海域学」とは何かということ、私のコメントと関連させて述べさせていただきます。これからの海域学は、近現代まで視野に入れて考える場合には、陸域も取り込んで、情報、人的交流が港があることによってどう展開しているかということ、考えていくということになりましょう。

それから最後に、堀本先生と上田先生のお話に若干のコメントをさせていただきます。東南アジアをやっている私からしますと、中国、インドをご専門とするお二人のテーマは、やや鳥瞰的に海域世界とらえておられるかなという印象を受けました。「真珠の首飾り」、「ダイヤの首飾り」のお話をされましたが、「ダイヤの首飾り」という言葉をなぜ地元のインドの人は知らなかったのか、私は興味を持ちました。彼らにとってそうした議論はどういう意味を持つのか、ということを感じさせられました。以上であります。

竹中：このプロジェクトは『21世紀海域学の創成』という名前で、「南洋から、そして南シナ海、インド洋、太平洋の現代的ビジョンへ」という副題がついています。私も共同研究の中に入れてもらったのですが、今は何を作ろうとしているのかをみんなで探しているところ、作りかけているところです。まだ出発点なので自分自身でも何を考えるべきかについて、そこまではっきりしておりません。しかし、観光学部の豊田先生がおっしゃいましたように、立教大学は、日本が大きな海洋帝国、陸上帝国を建設しようとした時代に作成した軍事的な地図の資料を所蔵しています。したがって、それらの資料をもとに、21世紀の私たちがそれをどう読み解き、日本、アジア、太平洋、そしてインド洋も含めた世界を認識していくのかという学問的な課題に挑戦する共同研究に着手することになったわけです。

私自身は国際政治学やアジア、そしてインドなどを勉強しています。ジェンダー研究もしているのですが、さまざまな現代の関心に照らして海を眺め、過去の知識や情報を批判的にとらえ、そこから未来への展望をどう生み出していくのかを探求する共同研究であろうと考えています。学際的なチームで、異なる分野の方々のお話を聞いているわけですが、これらをどのように結びつけていくのが、これから努力していくべき問題だと思っています。つまり、専門分野によって違う、海への視線やそれに基づく議論を、どのように比較し、意味のある形で結合していけるか、ですね。

例えば、日本には「島国」というアイデンティティーがあるわけですが、尖閣諸島、北方領土や日韓の間の竹島の領有権問題もあります。いいかえれば、太田先生の話に近いような側面の「日本」もあるのですが、領土や領有権をめぐる軍事的な緊張の高まるという、堀本先生の話に近い「日本」も現実に突きつけられています。

とはいえ、海は人間的であるよりも、何よりも自然そのものです。3.11の東日本大震災のときには、大津波という大きな悲劇とともに海と自然の迫力を私たちは経験することになりました。最初のご説明にもありましたように、2004年の12月にはスマトラ沖から、東南アジアで焦点を当てられた地域、インド洋、ベンガル湾のアンダマン・ニコバル諸島とか島国スリランカも津波に襲われました。改めて人間を超える力を持つ海という自然に直面したわけです。

もちろん、海というものを人間にとって利用できるモノとして見ることもできます。現在の国際政治、国家や国民国家の支配権、領土や排他的経済水域、航空識別圏などの議論は、政治的な意味合いを持つ唯物論ですね。あるいは経済圏として見る見方もあります。貿易ルートとか、エネルギー資源のある土地へのルートとか。きょうの話で言うと、なぜインド洋が日本にとって大事かと言うと、死活的なエネルギー資源のある中東への道だからですね。けれども、こうした見方は、人間の長い歴史の中ではほんの最近の、現代国家とか市場経済の土台に立ったものです。19世紀以来、そういう見方のほうが新しかった時代が続いたのですが、今はそれが逆転しつつある。自然としての海を捉え直さざるをえなくなってきました。環境や災害の問題はそうした問題を提起しています。そういう意味で21世紀海域学を構想すべき時が到来していると思うのです。

お二方の報告を聞いた上で、3つの議論を提起したいと思います。

第一の論点は、外邦図も含めた「地図」の意味です。地図っていうものをどう考えるか。かつては高い山にでも上らなければ、平地や海面は観察できなかったのです。けれども、今では

航空写真が撮れる。人間がこの地球上の表面ではいずりまわっている次元では得られない地球を見ることができる。上から見て行く、つまり「パースペクティブ」という言葉を使うわけですが、鳥のような目で地球上を見て測量することが可能になった。鳥瞰図です。そういう測量ができるようになったのは、太田先生が指摘されたように、19世紀産業革命以後です。当時の技術革新と帝国主義的な軍事力によって、西洋諸国がアジアの地図を作った。それに対抗して、日本では江戸時代の終わりに伊能忠敬が測量を行ないました。ともあれ、鳥のような目で地球を見る力、そしてその力をベースにしながら地図を作る力が、現代人の世界観、パースペクティブを作り出しているわけです。

要するに、地図の背景に近代国家、近代的な帝国によってアジアが支配された時代があります。そして日本の外邦図は、帝国主義的な拡大をめざす日本がそうした西欧の支配に反発しようとしたとき、作成されたものでした。したがって、外邦図の中には産業革命、近代と伝統、西欧対アジア、そしてアジアの中での自己主張といったものが多面的に孕まれています。

論点の2番目は「国家」です。帝国と言いましたが、イギリスの前には、それに先立ったオランダとかポルトガルなどがあり、イギリスに対抗したフランスや後のアメリカ、それらに対抗する日本が、海の帝国として台頭しようとしてきました。それが19世紀、20世紀です。強い国家が「海の帝国」になって海外に出て行く。植民地を求めて出て行く。港の都市を作って陸に入り込み、やがては土地を支配する陸の国家を作る。例えばインドであれば英領インドを建設し、オランダがインドネシアを建設する。ですので、地図の裏に、国家というもの、そして帝国というものがあつた。

逆に、国家に支配される人々も作り出され、同時に排除され抑圧される歴史が展開しました。きょうの話で言うと海賊ですね。私はインドの盗賊を勉強していますが、同じような歴史的プロセスです。新しい国家の軍事力に対して、それまでその土地で暮らしてきたさまざまな人々が抵抗し、成敗されていく。でもなかなか成敗されないんですね。現代的な国家が完全には成敗できないピープル、人々の世界がある。おもしろいんですね。ですので、地図というものの基礎に国家があり、海域学の裏には国家学、帝国学がある。そうだとすると反対に、ピープル学、民衆学、海賊論、盗賊論、あるいは海のシルクロード論など、これまでとは全然違う地図学や海域学が構想できそうな気がしてきます。

21世紀の民主主義の時代は、自由や平等の時代でもあります。そうした時代に従来の国家論的な海域学を壊して、民衆的な海域学を議論できるだろうか。チャレンジの1つになると思います。

最後の論点は、「国際政治」です。国際政治学では、海の議論とは大国の議論で、かつてなら帝国主義国家間の議論、現在は大国のパワー・ポリティクスの議論です。

きょうの堀本先生のお話の中で出てきましたが、近現代の時代は欧米諸国が海の帝国、海の大国でした。それにはソ連も、そして日本もチャレンジしました。今チャレンジしてきているのが中国、そしてインドもそれに続こうとしています。ですから、堀本先生のお話の土台にあるのは、21世紀のアジアで大国化している国々が、海に出ようとしている。アメリカの覇権的秩序に対抗しようとしている。そうした動きにアメリカやアメリカの同盟国はどう対応するか、というお話です。

しかも「インド洋」が焦点でした。インド洋は大変面白い海域で、昔は諸大陸がくっついていたのが大陸移動で今のようになったと言われていていますね。中国はインド洋に面していません。

けれども、エネルギー資源を持つ中東へのルートであり、成長するアフリカ、大国化するインドと、豊かさを増す東南アジア、そしてオーストラリアが取り囲んでいます。アメリカも同じですけれど、中国もインド洋を通らないと中東やアフリカに行けない。だからこそ、インド洋のパワー・ポリティクスをどう考えるかが、国際政治の焦点になりつつあるのです。21世紀がアジアの時代だとすると、成長したアジア諸国がこれまでの大国と競合する地域なのです。

このプロジェクト自体の文科省の名前に「戦略」という単語が入っています。私はこの言葉はあまり好きではないのです。なぜなら、「戦略」という言葉には、どうしても軍事や経済の視点からする国家の姿が隠れているからです。しかし、この共同研究では、国家的な戦略を脱構築して、ピープルの視点から見直していくということが大事ではないかと思っています。

「ダイヤの首飾り」をインドの人はどう考えているのかと弘末先生が問われました。長い歴史の中には、海賊がいて王国を作ったという話もありますし、いろんな人たちが一緒に船に乗っていたという話もある。本当におもしろいですね。一直線ではないのです。現代の国際政治学で論じている国家と国家の対立でもなく、近代史に書かれてこなかった、まさに国家の力に人々が屈服していく光景でもなくて、平和な民衆の海をどう構想できるのかが、究極の問いなのではないかと思っています。

まとめると、帝国や大国の台頭、大国同士がぶつかり合う海域学を乗り越え、人々の海域学、平和的な共存の海域学、人々や諸国家が協力し、みんなが仲良くできるインド洋やインド太平洋の学問的研究を展開することが課題ではないかと思うのです。

太田：お2人のご意見を先にお聞きして、自分の考えも深まりました。今日の堀本先生の話、現代インド洋を考えるお話だったのですが、実際のところ、かなり西太平洋もお話の中に入っていて、西太平洋とインド洋とがもうこれだけ一体化しているのかということ強く感じさせる感じる報告でありました。

そうしたときに、私は東南アジアを扱っているものですから、頭に浮かんでくるのは、こういった大国が入ってくると同時に、それに何とか自分たちの存在意義を示そうとしているのが、ASEANではないかということです。ASEANも最近の動向を見ていれば分かりますように、とても一体的な行動は取れていないのですが、やはり大国が完全にこの地域の主導を握るといふことに対しては、何らかの主体性を示そうとしているように私には感じます。堀本先生のお話の中にもASEANを入れるとしたら、それはどういった様子を持っていると先生はお考えになるか、伺いたく思います。

それから、竹中先生のお話をもう少し引っ張ってみたいのですが、堀本先生の話は安全保障をめぐるお話ということで、国家同士のまさにせめぎ合いの部分というお話だったのですが、同時にここに挙げられている国々というのは、相互に経済的な依存が非常に強い国々でもあります。ですので、そういった経済的つながりというもの、あるいはそのつながりの近年における深化というものが、先生のお話の中心である安全保障をめぐる国家の関係、あるいはせめぎ合いに、どう影響しているのかということもお聞きしたいと思いました。

それから、私は一時期シンガポールにいて、あるいは今所属している大学でも学生交流や留学を担当していて、これらの国々の相互の学生の行き来が相当多いことを実感しています。そのような中で最近、インドから留学しようとする学生の行き先がどう変化しているかといったデータを見ました。それによると、中国やオーストラリアは重要な行き先になっていたと記憶しています。ですから、そういった流れも今後はこういった国々の関係に影響を与えていくのかなとも思いました。恐らくこれはまだデータが新しすぎて、学生が動き始めたという段階では、まだあまり国家の安全保障には影響しないかも知れませんが、今後はそういったこともこの国家関係の要素にかかわるのではないかと考えました。以上です。

フロア A：太田先生への質問です。先生が歴史的に見てきているものは現代の海賊とどうつながっているのでしょうか。東南アジア、特にマラッカ海峡周辺の海域における海賊の脅威の現状、周辺国による対策について教えてください。また海賊に対しての国際協力の課題についても教えてください。

太田：最近でこそソマリアが、海賊が世界で一番多発する海域になりましたが、2000年代の初めごろまでは、それはマラッカ海峡でした。マラッカ海峡は世界の海賊の最大のホットスポットと言われていました。そして、それに対して何らかの対策がなされなければいけないということが言われて、今どうしても正式名称を思い出せないのですが、シンガポールにそのための国際機関ができました。これには日本も相当出資をして、スタッフも送りこんでいるのですが、その活動はなかなかうまくいきません。まず反対するのが、マレーシアとインドネシアです。このマラッカ海峡をめぐる商船が運ぶ富がこれだけ多くあるのに対し、そのうちインドネシア

やマレーシアに落ちるのは極めて僅かではないと両国は主張します。つまり、彼らはこの海に面しているというだけであって、全く利益も得ていないのに、この海域の危険極まりない海域の安全保障の責任を持たせられるのはかなわないという理屈を言って、ほとんど協力しません。最近までは、それが海賊対策のうまく働かない最大の要因であると言われていました。

ところが、そういうことを言い続けているということが、国家のイメージにも、また国家の信頼にも関わってくるということで、その流れは若干変わりつつあります。今、マレーシア、インドネシア、フィリピンは、海上保安庁レベルでの協力を行い、それぞれが船隊を出して、海域をパトロールするといった協力活動を行って、いわば軍事力を示す活動を行っています。しかしこれも、まだ効力を上げていません。そういった船隊が通るといって海域をコントロールしようとしても、その時だけ海賊と言われる人々は身を隠すわけです。こういった大型船が航行することによって、海賊をコントロールすることはほとんどできないそうです。現代の海賊と言われる人々の舟と言うのは、小型漁船のレベルです。それに強力なエンジンを載せて、強力な武器を持って銃器を持って他の船に上がり込んで、その船員を脅迫して身代金なり金品を要求するという形をとっていますので、そういった大型船でコントロールできるような存在ではないわけです。

そして、その小型船による海賊というのは、地方のマフィア組織レベルで行われています。その犯罪の規模も比較的小さいです。ですから、なかなか国家レベルで捕獲できるものではありません。地方のマフィア組織が本当に貧しい漁村に行って、収入がない漁民たちにある程度の金を払って、海賊をやらせています。さらに、地方の警察もマフィア組織とグルになるほど腐敗しきっていて、とても海賊をコントロールできるという状態ではありません。

ですから、現代の海賊への対策を有効にするためにどういった方法を挙げられるのかというと、今すぐこういう形でということとはなかなか言えません。その問題の元凶になっているのは、やはり富の偏在であり、そういった漁村の産業の遅れです。ですから、本当に地道な産業振興、地域社会振興のようなものを行わない限り、海賊はそう簡単にはなくならないものなのかもしれません。

フロア B:海賊は認識されるものであるといわれましたが、そうすると海賊はあくまでも他称、他者・他人から呼ばれる名称であり、自称として海賊というのは存在しないと考えていいのでしょうか。あるいは、やはり漫然と海賊と自称する人たちもいたのでしょうか。

太田:確かにほとんどの場合は他称です。その海賊というものを征伐するということによって自らを正当化する政治単位というのは、近代国家に限らず、それ以前から存在します。自分のライバルを海賊と呼ぶことによって、自分の攻撃を正当化するわけです。こうしたことから、基本的に海賊が他称として用いられていると考えることは出来ると思います。

では、自称としての海賊が全く存在しないかということ、それほど簡単でもありません。スルタン・マフムードがリアウを離れた後、多くの人々の支持を集めることができたのは、彼が海賊と呼び得る海上商業軍事集団を成功させているその手腕のためです。海上における軍事行動の成功は、すぐにリーダーのカリスマと結び付いて、人々を引き付けるための重要な要素になります。ですから、こういったリーダーたちは、自分たちがいかにその襲撃に成功しているかということを強調します。

こういった場合に、彼らは仮に海賊という言葉を使っていたにせよ、使っていなかったにせよ、少なくとも自分たちの活動を犯罪的だと認識して、隠したり水面下に置いたりしてはいません。これは、一種の自称であると私は考えます。自分たちの軍事的指導力や勇敢さといったものを主張しているという点において、海賊のある一面を自称しているのだと私は考えています。ちょっと漠然とした答えになりますが、以上です。

フロア C：今日よく問題視されている領海概念形成において、海賊は歴史的にどのような影響を与えていたのでしょうか。

太田：非常に大きな影響を与えていたと言えます。それには海賊、それから密輸商人が重要な役割を果たしました。ある一定の海域がある国に属するという考えを持ち込んだ植民地国家は、それによってその領域を、つまり国境を超えて行く船は、港で関税を払わなければならないことにしました。特に違う国から来た場合は、国境という線を超えると、その貿易は輸出入となりまして、国境内から来た他の船とは異なり関税を払わなければならないということを主張します。

ここにおいて、どの領海を超えて来ているか、超えて来ていないかということへのチェックが重要となり、厳しくなります。そして、そうしたルールを無視して来ているグループは、まずは密輸商人と言われるのですが、彼らはまたしばしば海賊と呼ばれるようになります。実際のところこの区別はそれほど明確ではありません。密輸商人と言われる人は、非合法であるがゆえに武装する必要があったとも言えますし、あるいはそのように国家のコントロールに入らない人々を非難する上で、海賊という言葉が好まれたということもあると思います。これもなかなか簡単ではないですが、資料を読んでいきますとどちらとも言えないケースが多く出てきます。

そして、今日よく問題視されるのは、国家がどれほどある領域や領海をコントロールしなければいけないかと考えるかという問題です。例えば、アメリカ占領期の沖縄では、台湾との間に非常に活発な貿易が行われていました。貿易と言っても国家のコントロールはなく、今日の観点から行くと、これは密輸です。ですが、それが台湾と沖縄諸島の人たちにとって、非常に重要な経済活動であることを認識していたアメリカ占領政府は、それを黙認しました。それが、沖縄が返還された後しばらくは続きますが、その後だんだんにコントロールが厳しくなっていたと聞いています。

ですので、先ほど私の話として、近代国家が現れて海に線を引いていくということで領海概念が生まれ、それを破る人間が海賊として呼ばれるようになっていくという話をしましたが、どのくらいそれを厳しくコントロールするかという国家の姿勢によっても、この概念形成は非常に大きく影響を受けると思います。

堀本：皆さんのおっしゃること、それぞれごもっともということです。特にお二人の先生から東南アジアに関するというのが欠落しているというのはおっしゃる通りで、それを埋めるために、去年インドネシア行って、オーストラリア行って、どう見たら南アジアが見られるだろうっていうことをやってみました。どうしても、インドにいて聞いていると、東南アジアってスポッと落っこちてしまうのです。彼らに聞くと、極端に言えば今のアジアはアメリカ、中国、インドで動いているといい、日本や東南アジアは落ちます。こういうインド人風の考え方がいつの間にか自分にしみついたのかなというふうに深く反省しています。

それはそれとして、皆さんがおっしゃる通り、東南アジアをどういうふうに、特に海域の観点から考えると、どういうふうに位置づけるのか、どういうふうに関連性を持たせるのかというのは極めて重要なポイントだと思うし、これからこの部分については詰めていきたいというふうに考えます。特にインドから東南アジアを見ると、やはり非常に関係性が高い、印僑の関係もあり、歴史的に英植民地だった関係もある。このためインドというのはなかなか調子良く、一方中東にもちゃんと手を伸ばして権益を守っている。一方では、シンガポール、タイ辺りもちゃんと手を伸ばすということで、なかなかうまく両翼を使った形で外交を展開しているところがありますから、その点についての目配りというのもしていけないと、特にインドの場合は、ASEAN や東南アジア諸国からしっぺ返しを食うのではないかという感じを持っています。

最後に竹中先生の話聞いていて思ったのですが、国連海洋法条約、アंकロスというのがありますけれども、ああいった形の枠組みっていうのも今から作っておかないと、多分この先行ったら無理、なかなか利害調整が難しいので厳しいのではないのでしょうか。特に中国の動きを見てみると、何となく、中国は、米国の後を歴史的に追っかけているのではないかと。アメリカは 1890 年代に米西戦争をやって、それで太平洋を横断する形でフィリピンまでの海路を押えることに成功するなど、どんどん大きくなっていった。最終的に第 2 次世界大戦が終わると、世界の GDP の半分を持っている。今は 4 分の 1 になっている。中国のやっていることっていうのは、陸は大体もう固定しています。海はこれからどんどん拡大できる。まだ海は支配されていない、圧倒的に多い。最近ではもうそれだけでは足りなくて、月に衛星を打ち上げて、これで俺たちの領土の拡大ができるっていうことを言い出しているのを見てると何となくアメリカのやっていた、歴史的にやっていたことを、今中国がやっているじゃないか。日本はかつてやったかもしれませんが、というふうなことを考えます。

ですから、これから必要なことは、おそらくこの海域学はただ漫然とその現状分析をするだけではなくて、方向としては竹中先生言うところの平和な海をどう回復し、作っていくのかということを考えるときに、やはり比較的疑問、批判が起きにくい国連という場を使いながら、平和な海にするための仕組みを国家間で作っていくというのではないかなという印象がありました。以上です。

フロア A: 奥山真司の『新版地政学』（五月書房、2004）という本を参考文献として挙げられていますが、その新しい地政学というのは、どのような内容なのでしょう。

堀本: 奥山真司さんですが、まだ若い方で 30 代の中ぐらいだと思いますけど、アメリカで主に地政学ジオポリティックスを学ばれた。そのアメリカ流のジオポリティックスを本にして書いたという、大変面白い本でした。彼がその中で、戦前の日本では地政学があったけれども、戦争と結び付けられる形であった。戦後は日本では地政学でなくなったというようなことを書いています。彼が憤然として重要なのだということを一生懸命この本の中で力説しているという感じです。

フロア B: 地政学についての定義を「地理概念上に展開される国家戦略学」とすると、海域学はどのように考えるのでしょうか。このような地政学的視点は重要だと思いますが、現在の課題として取り上げるのではなく、歴史的な要素を加味したものとして、学問を創成していくという考え方ではどうなのでしょう。

堀本: ある意味では、20 世紀までが陸地の争い。また国境紛争とか未解決な領土が一杯ありますが、陸上での国家間の線引きを巡る争いというのはおおむね済んでいます。そこで残っているのは多分海と宇宙。特に月なんかはそうかもしれませんが、そういう時代になってくる。特に今、当面の争点になっているのは、アジアで言えば東シナ海、南シナ海、いずれ今度はインド洋に行くかもしれません。

そうすると、もう今では今の各国の動き、アメリカもそうですし、インドもそうですし、日本もそうかもしれません。東南アジアもそうかもしれません。ある意味ではその地政学というよりも、言葉はないのですが海の「海政学」みたいな観点からこの領域の状況をどういうふう考えていったら良いのか。何もそれは戦争するとか、ナショナルポリティックスとかナショナルインタレストをむき出しにするというだけではなくて、もう少し全体的な新しい展開を従来の地政学にのっとった形で整理、分析していくという観点が、もしかしたら海域学の場合でも、必要かもしれない。海政学です。そういったことを今回やりながらちょっと考えたことです。以上です。

上田：今までの話の中で、海政学、地政学に対する海政学という言葉が出てきました。実を言うと、このプロジェクトを構想する段階で、私も「海政学」という言葉を考えたのですが、ちょっとネットで調べたところ、濱下武志さんが「海政学」という言葉を使っております。ほかにもいくつかの方が「海政学」という言葉を使っています。

先程の堀本先生の話の中で、今中国がアメリカの帝国主義的な海への進出を後追いするような形で議論を展開し、進路を定めているのではないかという話が出てきました。数年前に中国に行って驚いたのが、海洋強国という話が全面に出る前に、「これから中国は海に乗り出すべきだ」といった本が出されていまして。その本の前半部分では、マハンの学説を丹念に紹介して、中国もこの路線で行くべきだということが書かれていました。おそらくそれは一般書なのですが、明らかに中国の今の意識として、アメリカに続いて中国が正当性を引き継ぐべきだという発想があるということになります。

そのようなことを考えて、海政学というのは、言葉としては地政学との連続性みたいなものが強調される可能性があり、かなり慎重に扱わなければいけないということが念頭にありまして、海政学という言葉をあえて今回は表には全く出さないで進めております。ちょっと私自身の考えてきたということになるかと思えます。

それでは質問にお答えしながら、今回のプロジェクトの全体の方向性を少しお話ししたいと思います。

フロア A: 朱印船の船員は日本を背負っていなかったとして、何を目指していたのでしょうか、どのような人々とどのように協力していたのでしょうか？ 鄭和の艦隊にもさまざまなグループが参加していたと伺いましたが、だれがどのような利害に基づいて参加していたのでしょうか。

上田：私の『蜃気楼王国』という本の冒頭で紹介をしているのは、メンデス＝ピントというポルトガル商人の話です。この話は平凡社の東洋文庫から『東洋遍歴記』というタイトルで日本語訳が出ているのですが、彼が乗っているジャンク船が、キアイ＝パンジャンという名前の華人の海賊の船と遭遇した。あわや戦争になりそうになったのですが、お互いポルトガル人が乗っているということで、戦争は止めましょうという形で何とか契約を結びます。そこでは聖書の上に手を置き、証人を何人か立てて契約を結んだと書かれています。

私自身が考えているのは、多様な人が乗っている船の中でどのように秩序を形成するのか。それを海の上で秩序を形成するということが、非常に大きな意味を持っているということです。今のケースは、聖書の上に手を置いてという形で、いわゆるカソリックの信念の下で契約の実効性というものをお互い保証し合うという形をとっていたわけです。太田さんの話の中でも、マレーのマレー法でしたか？ マレーの秩序というところで、海域の秩序というものができあがっている。要するに、その船の上で多様な人が乗っているということだけではなくて、その船の上で紛争が起きないように、海の上でのある程度の秩序をどのように保つのかという工夫が、なされていたのではないかと。その辺りのところから、おそらく今後の将来像を展望していけないかということが考えているところであります。

例えば、鄭和につきましても、鄭和自身の行動を見ますと、おそらく彼本人はムスリムであ

ろうという気持ちはあったと思います。一方で彼は宗教的には非常に多様な面を示していき、出帆する前には道教的な神である天后廟・媽祖廟に詣でて、一文を書いていますし。例えばスリランカだったでしょうか、に行ったときには、その紛争を解決して、タミル語と中国語とペルシャ語の、3つの文字で碑文を書いております。これはだいぶ前に掘り出されております。

ある意味で多様な文化というものを共存させていくというのが、やはり海に出たときの鄭和の1つの姿であったというふうに思います。その辺りの秩序形成、海の上での多様な文化を紛争させずに秩序を保らせていくというような発想というものが、鄭和にもあったのではないかと。そういう秩序形成、海から発する秩序形成ということが、非常に重要なのではないかと。ことです。

フロア B: 現代日本が直面しているような課題でもあるでしょうが、21世紀海域学の創成における現実的な課題は何でしょうか。それと現近代の中国史、アジア史研究所の課題との関連ということで伺いたいのですが。

上田: 海の話を見て行きますと、基本的に自由に航行できる海というものをどのように保つかというところで、私が“蜃気楼王国”と言ったようなところで、海上での秩序を形成する出発点があったのではないかと考えております。私のこの本の中で、王直という人物を割と全面的に取り上げています。彼は中国的に言えば倭寇という海賊です。こういうレッテルを貼られているのですが、彼が考えたことというのは、南シナ海、東シナ海を結ぶ交易の支えるための秩序形成をやっていたということでした。

時代はあきますけれども、その次を引き継ぎます、鄭芝龍（鄭成功の父親）がどういうことを行ったかという、海の自由な交易というのを前提に置いて、その上でその通行する船については、安全を担保するために何らかの通行税を支払わせる。それによって、自分自身の海軍力を作っていく。基本的に中国の軍閥ということにもなるのですが、海において、海の自由な交易、航行を保証するということが、その政権の基盤になっている。そういうところが、私が蜃気楼王国と言ったもの基本的なところ。自由な交易、航行というものを保証するために、秩序形成を行っていくという点で全く同じで、1つの終着点というような形で、鄭芝龍の政権があったというふうに思います。

そうした船に乗っている多様な人たち、あるいはさまざまな港から出てくるさまざまな船の間で、お互い衝突しない、お互いに奪い合わない、そういう関係をどのように作っていくかのルール作りというものが、今この世界で考えられるのではないかと。いうふうに思っています。

最近海がブームでして、羽田正さんが“ニンプロ”と通称呼ばれている大型プロジェクト「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創成」の1つの成果という形で『海から見た歴史』（東京大学出版会、2013）を出されています。この本の中で、この海域の歴史のような形が述べられていて、要するに王直などの後期倭寇の時代から、近世に入って中国で清朝、日本で徳川政権、そしてジャワ等ではオランダの1つの政権ができあがり、17世紀後半から住み分ける海というふうに歴史区分をしています。

なぜ陸の政権がなぜ住み分けなければいけないかという、私の仮説としては、それは鄭芝龍に代表されるような海に基盤を置いた、海の自由な航行というものに基盤を置いた1つの政

治勢力を、陸の政権が何とか食い止めるために、住み分けていかざるを得ない。それが近代的な意味では、領海というようなもので段々結びついていくと考えられるのではないかと思っております。

資料1はモンゴル、元朝から現代までのシナ海域の時代区分をちょっと考えたものです。その下の方に「環球システム」と書いてありますが、これはグローバリゼーションのグローバルの中国語である

資料1 シナ海域の時期区分

1274	元朝シナ海域侵攻開始	銀大循環メカニズム
1371	明朝の海禁令	朝貢メカニズム
1567	朝貢以外の交易を容認	互市システム開始
1684	清朝、展開令を施工	互市システムの完成
1860	北京条約の締結	環球システムの開始
1945	太平洋・日中戦争締結	環球システムの完成
2012	中国「海洋強国」路線	これから来る世界

「環球」という言葉を、それをそのまま拝借をしたものです。現代的、日本の通常の言い方で「グローバルシステム」ということだと思います。

先ほどの堀本さんの方で1869年のスエズ運河開通のところで、それがアメリカ大陸の横断鉄道と同じ年、明治維新の2年後だという話がありました。ある意味でこの60年代、中国では北京条約によって大使館が北京に置かれるというような状況で、グローバリゼーションというもののグローバルなシステムというのが、まさに1860年代に開始をした。そして、それがアジア太平洋戦争という1つの転機を迎えて、その後アメリカの帝国の世界になっていくという形で書いております。ある意味で、海に乗り出していくということが日本のアジア太平洋戦争の失敗であるように、中国にとってもこれから大変なことになるだろうなと思いつつ、2012年胡錦濤が「海洋強国」と言い出したときから、これからどのように展望していくのか、私自身としても考えていきたいというふうに思っております。

フロアC：海域学の全体像について質問です。4つのチームがそれぞれ深く掘り下げるだけでも面白いのですが、各チームがバラバラに活動するだけではなく、それぞれが関連し合うところを強調することにより、海域学が独自の学問領域を確保できるのではないかと思いましたが、いかがでしょうか。

上田：まさにその通りのことを考えております。このプロジェクトではその場所というか、位置データを大切にしていきたいと思ひまして、1つの位置に政治、歴史、文化、観光という4つのデータを重ね合わせて行くことで、1つの場所が多様な側面を持っていることを確認し合うことを目指しています。

それと同時に、海外調査というものにかなりの予算を配分して、できればそのグループの各チームから参加していただき学際的なグループで調査することで、その現場で議論をたたかわせることによって、チームの相互交流というものを図っていくというようなことも考えております。こういう形でこれから2年間になります、進めていこうということになります。